

グローバル時代に生きる好奇心・表現力・創造力を「民族音楽鑑賞」や「音楽表現」を通して高める

世界中の人びとは、歌うことや演奏すること、音楽を鑑賞することを、それぞれの文化のなかで楽しんでいます。その音楽を通して、グローバル化するこの社会で活躍できる力を伸ばそうとしている先生の実践をご紹介します。

取材・文/松井大助
撮影/かむろ みや



音楽
やまほく
山白育枝先生

1985年に奈良県の高校教員に。30代のときに民族音楽の授業案を作成、以降、民族音楽を鑑賞・体験する授業を実践してきた。音楽科担任として「音楽で社会貢献できる人」を育てることを目指している。前任校より特別支援教育コーディネーターとして教育相談も担当。

民族音楽鑑賞を通して 好奇心と柔軟性を育て

高円高校の芸術棟ホール。山白先生はテレビの画面を隠してDVDを再生した。聞こえてきたのは楽器音や歌声。生徒たちは音を頼りに、どの楽器や歌がどの国のものかをグループで考えた。手元には、候補の国が記された地図がある。「この音は三味線っぽい。モンゴル?」「すごい声。こんな人いるねんなあ」「ハンガリーの音楽はもつと陽気そう」

山白先生は、1年生の音楽の授業で、毎年、民族音楽を扱っている。その狙いは生徒の好奇心や柔軟性を育てることだ。「感受性の強いうちに、せまい価値観にとらわれず他人を知ろうとすることや、社会の様々な出来事に興味をもつことは、生徒の精神的な成長に欠かせないと思うのです。生徒には『地球は小さくなっているよ』とも言っています。だから世界を見てほしい、そのうえで自分は何をしたらいかが考えるのが大事やで、と」

民族音楽を一通り聴き終えたら、映像を観て答え合わせ。山白先生がその音楽の背景にあるものや相違点も補足した。トリニダード・トバゴの、2000人のチームによる庄巻のスチールドラム演奏。海岸に流れ着いたドラム缶を叩いて楽器にしたのが始まり。ハンガリーの舞踊チャールダーシュ。兵士募集の踊りがルーツで、足腰の強さが問われる踊りに、乗馬文化

園らしいパッカパッカしたリズム。農耕文

化の日本で発展した手踊り、いつとーにーのリズムとはだいぶ違う。

インドネシア・バリ島の舞踊劇ケチャ。悪霊を払う儀式から発展した、人間の声折り重なる音楽。モンゴルの歌唱法ホーミー。一人の人間が同時に二つの声を出す。実は日本の東大寺でもかつては同じようなお経の読み方がされていた。

続いて山白先生は、映像や絵本を交えてさらに二つの音楽を紹介した。アメリカのゴスペル、ブラジルのカポエイラだ。

そのルーツは、アフリカから奴隷としてアメリカ大陸に連れてこられた黒人たちにある。奴隷市場で人身売買された彼ら彼女らは、過酷な環境で働かされた。

「でも、彼らの救いは音楽やってん」

彼らは、命に感謝して神をたたえる歌を心の支えにした。それがゴスペルの発祥。手かせをさせられて虐げられるなかで、身を守ろうと足技中心の格闘技かつ



民族音楽鑑賞では教材用DVDを活用。写真はカポエイラの説明をしているところ。授業ではほかに中国の京劇についても紹介した。



映像だけでなく、生徒には実際に楽器にふれさせることもする。写真の楽器は、日本のアイヌ民族に伝わる口琴「ムックリ」。



ケチャの合唱を引っ張るリーダーパートは、常に男子に割りふっているわけではなく、積極的な女子にお願いすることもある。



パート練習では山白先生も各グループをまわり、一緒に歌ったり、アドバイスを送ったりして、生徒をさらにのせていった。

■ 1年間の主要な授業計画

1学期	校歌をひとりで歌う →グループで声楽アンサンブル「アラジン」
2学期	リズムアンサンブル→ギターアンサンブル →ギター弾き歌い「カントリーロード」
3学期	自由表現(二人以上のグループで。 オリジナリティを高くすることを目指す)

※実技試験や発表はクラス全員の前で行う。その本番に生徒が自信をもって臨めるよう、1対1でリハーサルも行う

■ 高円高校(奈良・県立)



School Data

普通科・音楽科・美術科・デザイン科/1983年創立
生徒数(2015年度)672人(男子213人・女子459人)
進路状況(2015年度実績)
大学111人・短大21人・専門学校57人
就職12人・その他15人
奈良県奈良市白毫寺町633
TEL 0742-22-5838・5839
URL <http://www.nps.ed.jp/takamado-hs/>

Outline

奈良県の公立高校で唯一芸術系学科がある学校。教育目標に「本校の特性を生かし、感性を育み、心豊かな生徒の育成を目指す」ことを掲げている。校舎には音楽が響きわたり、いたるところに美術作品も置かれている。総合的な学習の時間には、実社会で求められる自己表現力を鍛える「高志創造」という3年間プログラムを実施。基礎学力の充実と学習習慣の確立を狙った朝の10分学習「下学上達」も行っている。

舞踊を発展させた。それがカポエイラ。「そういう悲しい歴史を経て、彼らは奴隷解放令で自由になり、今のアメリカやブラジルの文化があります。そんなことをもちよと知っておいてほしいな」

に発表することになった！
焦ったのは生徒たちだ。未知の発声ややることに「え〜」とたじろいだ。背中を押すように、山白先生は言い添えた。「リーダーパートを男子に任せます。男子たち、いい？ これぐらいの勢いでやってね。……『オワッ!!』『イエッ!!』」

ケチャだけに限らず、山白先生は年間の授業のなかで、生徒による発表の機会をたくさん設けている。1学期にクラス全員の前で生徒が一人ずつ校歌を歌うことから始まり、グループでの合唱、合奏、自由表現と取り組んでいくのだ。そうした活動で目指していることは3つある。

「いい意味で押し強い人になってほしいんです。自信のなさから『目立ちたくない』という生徒も出てきますが、私はそういう子にこそ『自分を出して脚光を浴びる』体験をしてほしいんですよ。ただ、本番で大失敗すると生徒はすごく傷つくので、発表前の準備で自信をもたせることを心がけています(58ページのHINT & TIPS参照)。そうすると、生徒の顔はどんどん上向いてくるんです」

山白先生の民族音楽の授業は、鑑賞だけでは終わらない。2コマ連続の授業の後半では、生徒が様々なリズムの声を重ねるケチャに挑戦した。ケチャは、合唱用の楽譜が教科書に載っているのだ。はじめに生徒を5つのパートに割りふった。「オワイエブンブン」「チャクチャク」「ククチャク」「チャククチャク」「クチャク」といった声のパートだ。そのパートごとに練習したあと、全パートがそろってグルーブにチームを再編成しさらに練習。そのうえで……次回の授業ではチームごと

「自分にはじける覚悟があれば、意外と生徒はのびてくるんです。反対に私が恥ずかしがると、楽しさは伝染しません。生徒は本当に鏡のようだな、と思います」

一つは、自分を表現するための「プレゼン力」を生徒がみごとくことだ。「いい意味で押し強い人になってほしいんです。自信のなさから『目立ちたくない』という生徒も出てきますが、私はそういう子にこそ『自分を出して脚光を浴びる』体験をしてほしいんですよ。ただ、本番で大失敗すると生徒はすごく傷つくので、発表前の準備で自信をもたせることを心がけています(58ページのHINT

世界に目を向け、異なる価値観を許容し、自分の主張もちゃんとして、未来を創造していく。そうした能力や態度を、音楽の授業では音を楽しむ感性とともに育んでいける、と山白先生は考えている。



**生徒がリーダーシップを発揮し
自分をのびのびと出していく授業**

奈良県立磯城野高校 学校長
植島幹雄先生

山白先生とは前任の奈良高校で一緒にいました。私は社会科を教えていましたが、お互い旅好きなこともあり、よくお話をしました。好奇心旺盛で、生徒のためになることなら何にでも興味をもち、資料を集めたり研修に行ったりと熱心に勉強をされる方でしたね。

教頭になってからは山白先生の授業もよく見学しました。一斉授業ではなく、生徒にリーダーシップを取らせて、ご自身はアドバイスをして生徒をのせる。そうして生徒一人ひとりがのびのび自分を表現していける授業をされていました。これからの社会では、与えられた勉強をするだけではなく、自分から「こういうことをしたい」「こんなことがわかった」と表現することも必要。その点からも、芸術科の果たす役割は大きいと感じました。

**1 生徒が表現や創造をしたくなる環境を
1年間を通して整えていく**

授業の発表に、生徒が前向きかつ挫折感を抱かず挑めるように、山白先生は準備を大事にする。校歌の発表では1対1でハーサルを行い、音程が合わない子は伴奏する自分がキーを合わせて元気に歌わせ、褒めて自信を育む。自由表現では数カ月前から先輩の録画を見せて、生徒の創作意欲に火をつける。

**2 生徒一人ひとりの観察によって
はじける空気の呼び水となる生徒を探す**

生徒全員がグループ活動を恥がしげらず楽しめるように、山白先生は生徒観察を大事にしている。パート練習に慣れている吹奏楽部やコーラス部の生徒。仕切り経験のある部活動の部長。ムードメーカーの男子や女子。そうした子を各グループに割りふることで、表現を楽しむ空気を起こしやすくする。

**3 ポジティブな異文化体験になるように
面白がって学べることを大事にする**

民族音楽はただ鑑賞すると生徒が「不気味」「変」と思うだけで終わりがねない。生徒が異文化をポジティブに受けとめられるように、山白先生は面白がって学べることも重視。クイズにしたり、音楽のルーツや現代の歌とのつながりを紹介したり、ほかの国との違いや共通点を紹介したりしている。

**4 自らが音楽を学び続ける姿勢を示すことで
生徒の興味・関心を引き出す**

ほかの先生に教わったり、研究会や研修に参加したり、旅で芸術や文化にもふれたり山白先生は「音楽を学び続ける」ことを大事にしている。もっといい授業をするためであり、また、生徒は「先生がまず楽しんで学んでいるか」を見透かすもので、「私も試されている」という思いがあるからだ。

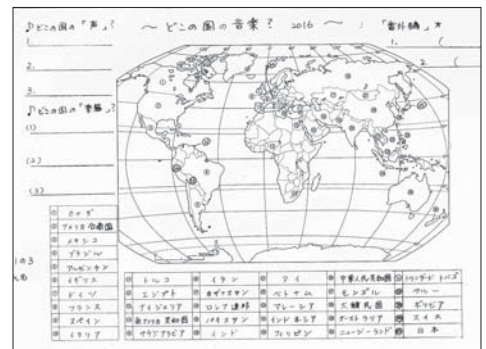
授業ができるまで

音楽的な教養を学べる
師匠は身近なところにいた

山白先生は高校1年生まで、「国語の先生になりたかった」そう。しかしコーラス部に所属して音楽も好きで、当時の顧問から音大を薦められたこともあり、音楽の教師志望に切り替えた。

「そこからは、浪人、短大から4年制大学編入と苦難の道でしたが(笑)、いろいろと経験できてすべて良しでした」

学生時代から旅好きだった山白先生は、3校目の勤務校で、民族音楽好きの物理



今回の授業で使った「最新版の世界地図」は、高円高校の同僚の社会科の先生に相談して提供してもらったものだ。



山白先生は旅行に行くとき、たいいてい現地の楽器を買ってくるという。授業ではそんな楽器コレクションも披露している。

の先生と出会う。ふと学校で耳にしたその音楽が気になり尋ねるとCDを貸してくれた。ほどなく産休に入った山白先生は、「夫に内緒で民族音楽のLDを買って」何度も鑑賞する。産休明け、公開授業の話をもらうと、民族音楽をやりたいと申し出て、当時の指導主事とともに、今の授業の原型をつくりあげた。

だから山白先生は、昔から民族音楽に詳しくはなかったわけではない。でも、それから20年以上、絶え間なく世界の音楽について教養を深めてきた。それを可能にしたのは、顧問を務めるコーラス部の活動や、音楽の授業に「ほかの先生の協力を積極的に仰ぐ」という独自のスタイルだ。

「社会の先生には、民族音楽にかかわる土俗的な信仰や文化について教わっています。国語の先生には、コーラス部の生徒が日本の楽曲を歌い込むときに、歌詞を

解釈するための専門家として助言をいただいています。英語の先生には、英語の楽曲を歌うときの発音の指導をしていただいています。今はALT(外国語指導助手)も学校にいますしね。奈良の先生には、琴や詩吟や雅楽など、日本の伝統芸能をたしなまれている方もいらっしやるので、そうした先生に音楽の授業での実演をお願いすることもあります」

たしかに、言われてみれば音楽にかかわることで頼れる先生はたくさんいる。とはいえ、山白先生はなぜそうした先生をどんどん巻き込んでいけるのだろうか。

「実家がお店をやっていたので、小さなころから他人との垣根が低いんですね。いいものをもっている方には、年配の先生だろうが、若い先生だろうが、校外の人だろうが、自分から『教えていただく』という気持ちで飛び込んでいくんです(笑)。私の師匠はもういたるところにいます」

世界の民族音楽を鑑賞・体感して思ったこと

—今日の授業を受けて、どんなことを思いましたか？
 「世界のいろんな楽器をみて、1回でもいいから弾いてみたいと思いました」
 —どんな国のどの楽器や歌が印象に残りました？
 「バリ島のケチャです。リズムカルで面白そうだった」
 「私は、トリニダード・トバゴ。あのスチールドラムを叩いてみたいな、と思いました。中学のときにドラムをやっていて、そのときに『いろんなものでも音を鳴らせる』というのは知っていたのですが、実際に見て、すごいと思いました」
 「日本なんですけれど、同じところに住んでいるのに、(アイヌ民族のムックリの演奏を見て)そういうのがあるんだ、すごいな、と思いました」
 「ハンガリー。コサックダンスみたいなやつ。音の感じとか、個人的に好きでした」
 —その後、実際にケチャをやってみてどうでしたか？
 「楽しかったです」
 —どんなところが？
 「みんなでそれぞれに違うリズムをやって、一つに合わせるというのが、すごく楽しかったです」



1年3組の皆さん



ケチャの発表では、テンポが早くて本物っぽかったチームから、独自のアレンジを加えたチームまで、各チームの個性も出たという。

生徒はこう変わる

お互いに意見を交わして協力関係を築いていく

民族音楽鑑賞とケチャの発表のあとで、生徒はふり返りシートを記入。民族音楽については次のような感想が寄せられた。
 「いろいろな国の楽器や伝統を知れてよかった。好きな音楽が増えてうれしい」
 「ほかの国の楽器や音楽、その国の人たちのアイデアに興味があった」
 「実際に自分の目で見てみたい」
 「国によってこんなにも曲の感じが違うことを知った。どの国の音楽もみんな楽しそうに一生懸命やっていると思った」
 「(民族音楽は)みんなが楽しめる。みんなから愛されている」
 生徒の視野は広がり、音楽の楽しさも改めて感じてくれたようだ。山白先生にはそのことがまた嬉しい。高円高校には音楽科があるが、この感想は普通科クラスのもの。普通科の生徒はプロの音楽家を目指してはいない。でも「人生のなかで音楽を楽しめるようになってほしい」。それも授業の大きな目標だからだ。
 生徒には「日本の伝統文化も知ってほしい」という。奈良県の公立高校には、郷土の伝統文化を学ぶ「奈良TIME」の授業が導入されており、本物にふれる機会がある。音楽の授業の自由表現では、和楽器や詩吟に挑んだ生徒もいた。
 「高校を卒業するまでに、生徒たちには、異文化を受け入れることもできれば、自分や自国の良さをアピールすることもできる」という。

「ケチャは最初『え』と思ったけど、やってみたら楽しかった。グループでやったから、グループの人との距離も縮まった！またこういうのをしてみたい」
 「(自チームの良かった点は)全員で意見を出し合えたところ。『ここはもっとこうしたほうがいい！』などとはっきりと言いつけて、ダメなところを改善することができた。全員が一つの音楽にしようとしたからこそ、できたことだと思う」
 「ケチャは最初『え』と思ったけど、やってみたら楽しかった。グループでやったから、グループの人との距離も縮まった！またこういうのをしてみたい」
 きるようになってほしいんです」
 そのためには伝統文化を知るだけでは足りない。相手としっかりとコミュニケーションを取って伝えていく力も不可欠で、そこで生きてくるのが、グループ活動の体験だ。ケチャを発表するまでの活動をふり返って、生徒たちはこんな手ごたえもシートに記していた。



授業で生徒につけたい力

	知識	能力	意欲・態度
つけたい力	世界の国の地域性・文化・歴史 ・生徒が世界の音楽について、特徴やルーツを学んだり、実際に合唱や演奏を試みたりすることで、国の地域性や文化への理解を深める 日本にある伝統音楽や民族文化 ・東大寺の伝統行事や、正倉院に納められている楽器など、奈良の文化財や伝統芸能を生かして、生徒が日本の伝統音楽や民族文化を学ぶ	プレゼン力 コミュニケーション能力 ・生徒が自信をもって音楽表現することに挑む ・グループで発表に向けて、生徒同士で意見を出し合って、よりよい音楽表現を目指す 創造力 ・合唱や合奏の表現の仕方について、工夫や改善の余地があるところを生徒が自分たちで探す	様々なことに興味をもつ態度 ・民族音楽について、政治的背景、生活習慣との関連性、楽器の誕生秘話などいろいろな切り口を紹介し、生徒の多様な好奇心をくすぐる 異文化を柔軟に受けとめる姿勢 物事に積極的に取り組む態度 ・ケチャのように「知る」「やってみる」と理解できるものがあることを生徒に体感させる
その力が将来にどう生きるか？	グローバルな舞台で力を発揮できる ・海外に出たときや、国内で外国人と接したときに、相手との距離を縮めやすくなり、また、自国の文化の良さもアピールできる グローバルな視野で企画立案できる ・仕事などで企画や計画を立てるときに、地域性の違いや日本の強みを踏まえて、提案をまとめている	チームワークを発揮できる ・仲間の意見を取り入れつつ、自分の意見も主張し、みんなと協働して成果を出していける 主体的に仕事を進められる 自分で試行錯誤して成長できる ・与えられた仕事をただこなすのではなく、どうすればよりよい自分で考えながら進められ、結果として自分のスキルも高められる	柔軟な発想で社会生活を送れる ・知らなければ損をしたり、だまされたりしたかもしれない情報にもアンテナを張れるようになり、よき市民として社会と関わっていける 世の中にある不思議を楽しめる ・せまい価値観にとらわれず飛び込んでみることで、世の中にある不思議なことや面白いことを、たくさん楽しんでいける